

情報技術レターズ巻頭言

今回初めて情報処理学会と電子情報通信学会の情報・システムソサエティ(ISS)が合同で全国大会を開催することとなった。情報関係の研究者が一堂に会して意見交換を行うことはそれ自体でも大きな意味を持つが、これを機会に、プログラムを見ていただくと分かるように、種々の魅力的な新しい試みを計画した。その1つが、論文の質を向上させることによって魅力ある会議にしたいということで、回を重ねて検討された。

日本の学会で通常行われてきた、無査読形式で自由に発表できるということは利点も多いが、質の良い論文を集めるという意味では問題のあることがある。そのため、各学会では論文賞を設けることなどで論文の質を上げる努力をしてきた。我々としては質の向上と、従来型の大会にあった研究の状況を気楽に発表できるレポートといった両方の性格を持たせるために、投稿論文は査読付き論文か査読なし論文のどちらかを選択できるようにした。査読付き論文は採択率を1/3程度にし、採択されなかった論文は一般論文として会議録に掲載することになっている。この1/3程度の競争で選ばれた論文がこの「情報技術レターズ」に採録された論文である。今年度は、371件の投稿論文のうちから34%に相当する127件の論文が採録されている。

また、優秀な論文に対する表彰を予定しており、この「情報技術レターズ」に採択された論文の中から10件選ばれることになっている。現在は査読結果から12件の候補に選ばれ、それを学会時の発表によって審査し10件が選ばれる。さらにその10件について発表会を開催し、その内の3件に対しては船井情報科学振興財団の支援による船井ベストペーパー賞を与え、他の7件はFIT論文賞が与えられることが決まっている。これとは別に、この「情報技術レターズ」と一般論文を合わせた中から優秀な若手の研究者を選び、FITヤングリサーチャー賞が授与される。

もう1つの特徴は、各分野における採択率をほぼ平均化したという点である。今までの学会誌では、伝統的な分野の論文が非常に多く、新しい分野の論文が非常に少ないという傾向がある。情報処理学会では一部の分野に対しては、研究会が主体になる論文誌を発行するなどの形で対策がとられてきた。しかしそれでも論文誌を発行できない新規の分野では論文になる割合は少ないといえる。ここではすべての分野に対して採択率をある程度平等にするという形で、新しい分野や情報と他の分野の境界領域の論文にも同じような機会を与えたということが特徴である。

「情報技術レターズ」に採録されるために投稿される論文がより良いものになれば、この大会は成功であると思われる。また、ここに採録された論文は、選ばれた質の良い論文として評価を受けたものであり、著者が自信をもって、それを論文誌や国際会議等で発表する方向にさらに拡張していくようになることを祈っている。ページ数が短く査読期間も不十分であったため内容のよさが十分に伝わらずに採録されなかった論文もあったであろう。査読結果をふまえて問題点を解決し、さらに発展させた論文にされることを期待している。このようにして、研究全体の質の向上と活性化がはかれればよいと考えている。

しかしながらこのようなことを行うためにすべての論文に複数の査読を行っており、非常に多くの人手を煩わしてきた。多数の論文を短期間で複数査読(研究分野によっては6人査読など)行っており、また、論文の選定のために通常よりも長い時間をかけたプログラム編

成会議が必要となった。査読方法など始めての試みであったために試行錯誤が必要で、途中で方針変更があったり、意志疎通の問題などもあり、予定したよりも大変な作業を皆様にお願ひする結果となってしまった。ここで、このために多大な時間を割かれたとりまとめの東京大学の萩谷昌己教授を始めとする、電子情報通信学会情報・システムソサイエティ研究専門委員会、ヒューマンコミュニケーショングループ研究専門委員会、情報処理学会研究会の代表の方々、また実際に査読にご尽力いただいた多くの方々に深く謝意を表する次第である。特に、多くの投稿数を有し、査読負担の大きい分野の研究専門委員会で率先して査読方法を検討していただいたことが、大きな助けとなったことを特記したい。実際的な手順を辛抱強く議論していただいた、喜多泰代幹事、中島秀之幹事を始めとするFITプログラム委員会の皆様ならびに合同の会議で種々のアイデアを出していただいた中嶋正之委員長、阿部匡伸幹事、加藤聡彦幹事を始めとするFIT実行委員会の皆様、このような新しい試みを根気強く手伝っていただいた電子情報通信学会事務局、情報処理学会事務局の方々、この試みに賛同して賞を出すことを決定していただいた船井情報科学振興財団にも深謝する次第である。

この成果が努力に値するものであるかどうかは今後の評価を待たないといけないと思っている。このような試みによって、即報性と質の高さという2つの目的が満たされ、FITが今後も運営されることになれば幸いであると考えている。

平成14年8月
FITプログラム委員長
上林弥彦

参考資料 分野別投稿数と採録件数および採択率

(ベストペーパーの候補の推薦は通常は0-1件であるが、投稿数の多い研究会では2件となっている)

	投稿数	採録件数	ベスト推薦	採択率
A:アルゴリズム・基礎	36	13	1	36%
B:ソフトウェア	24	8	1	33%
C:アーキテクチャ・ハードウェア	14	5	1	35%
D:データベース	25	9	1	36%
E:自然言語・文書	35	11	1	31%
F:音声・音楽	16	6	0	37%
G:人工知能	18	6	1	33%
H:生体情報科学	11	4	0	36%
I:画像認識・メディア理解	58	20	2	34%
J:グラフィクス・画像	36	12	1	33%
K:HC & インタラクション	25	9	1	36%
L:インターネット	9	3	0	33%
M:ネットワーク・MBL	29	10	1	34%
N:教育・人文科学	26	9	1	34%
O:情報システム	9	2	0	22%
合計	371	127	12	34%